【資料紹介】

手錢美術館蔵『朝宵草』翻刻と紹介

野本瑠美
（島根大学法文学部）

摘　要

手錢美術館（島根県出雲市）が所蔵する『朝宵草』は、手錢家七代当主の妻・さの子の自撰家集である。本稿では『朝宵草』を翻刻、紹介する。

キーワード：手錢さの子、『朝宵草』、家集、手錢美術館

解説

出雲市大社町の手錢美術館（注1）が所蔵する『朝宵草』は、手錢家七代有鞆の妻・さの子（一八一三～一八六二）が晩年に編纂した自撰家集である。

手錢さの子（注2）は今市の直良家の出身で、文政九年（一八二六）、手錢家七代当主の手錢有鞆に嫁いだ。中臣典膳や田中清年、富永芳久らに和歌や俳諧、狂歌を学び、安政三年（一八五六）の『丙辰出雲国三十六歌仙』に選ばれ、翌年の『丁巳出雲国五十歌撰』で跋文を執筆している。さの子の和歌や俳諧等の著作、さの子手沢本は手錢家に数多く残され、さの子の文芸活動を知る重要な手がかりとなっている。

『朝宵草』は、さの子自筆の家集で、和歌・狂歌四三一首（うち他人詠二首）と『丁巳出雲国五十歌撰』でさの子が執筆した跋文を収める。春・夏・秋・冬・恋（注3）・雑の部立を設けており、各部の歌数は、春八〇首、夏六九首、秋七〇首、冬四三首、恋五九首、雑一一〇首である。

歌題は歌頭に記されるが、詞書の場合は歌の前に通常通り記される。歌の右肩に朱筆の合点が見られるほか、歌頭に丸や「五」「六」「テ」「ヲ」等の文字が付された歌も確認できる。これらの記号が意味するところは不明だが、何らかの弁別がなされていたと思しい。このような合点や記号が付された歌が多数見られること、歌本文を訂正し

た箇所が複数見られること、歌題のみで歌本文を欠く箇所があること、各部の間に6～12丁もの白紙が残されていることなどを勘案すると、『朝宵草』は編纂途上の草稿本と考えられる。さの子は自身の詠作を分類・整理・推敲し、その中から秀作を選別して完成稿を編纂するつもりだったのかもしれない。

家集のうち最も新しい詠作は文久二年（一八六二）四月の詠作である（通し番号430・431）。春部と雑部の最後に文久二年正月～四月頃の詠作がまとめられており、家集の大部分は文久元年以前にまとめられ、文久二年の詠作が増補されたものと推測される。なお、さの子は文久二年八月に急逝した。

手錢家には『かたがたのせうそこうつし』『ちとせの舎御せうそこ』等、さの子周辺で交わされた書簡の写しが残されており、田中則雄氏（注4）や芦田耕一氏（注5）、久保田啓一氏（注6）によってその内容の一部が紹介され、さの子の歌文の創作やそのための学び、交友関係等が明らかにされてきた（注7）。『朝宵草』には島重老や富永芳久、佐草美清や佐草ささ子等の名が見られ、さの子の交友圏を知る手がかりが数多く含まれている。また、さの子の四季折々の生活が垣間見える詠作や、本居宣長への親愛と尊崇の念（364）、夫・有軒への愛情（342）や直良の両親に対する感懐（430）等、さの子の内面を窺い知る詠作も含まれている。本書は、さの子の文芸や人生を探る上でも、極めて貴重な資料であると言えよう。

注

（1）二〇二二年四月に「手錢記念館」から「手錢美術館」に改称。

（2）手錢さの子の事蹟については、下記の論考を参照した。佐々木杏里「手錢さの子と杵築文学」（『出雲文化圏と東アジア』勉誠出版、二〇一〇年）、田中則雄「手錢家蔵書と出雲の文芸活動」（『調査研究報告』三三、国文学研究資料館、二〇一三年三月）、芦田耕一『江戸時代の出雲歌壇』（島根大学法文学山陰研究センター、二〇一二年）、佐々木杏里「手錢さの子と女性の文芸活動」（『出雲地域の学問・文芸の興隆と文化活動』今井出版、二〇一八年）等。

（3）恋部冒頭（62丁オ）には「恋歌／雑歌」とあるが、部立名を記載した自筆と思しい貼紙には「戀」とあり、当該部立所収歌も全て恋歌であることから、部立は「恋」と認定した。なお、75丁オに「雑歌」という部立名、貼紙が見られる。

（4）注2田中論考

（5）芦田耕一「大社地方における文芸環境―「まとゐ」を中心にして―」（『島大国文』三四、二〇一四年一月）

（6）久保田啓一「杵築歌壇資料が語るもの―和歌史の見直しのきっかけとして―」（『手錢家資料を活用した江戸時代の出雲文化の発掘と再生事業―平成31年度出雲文化活用プロジェクト実施報告書―』公益財団法人手錢記念館、二〇二〇年）

（7）稿者もさの子の文芸過活動の一端を明らかにすべく翻刻・紹介に関わってきた。拙稿「翻刻『かたがたのせうそこうつし』」（『山陰研究』一一、二〇一八年一二月）、同「手錢記念館蔵『年中心おぼへ』翻刻と紹介」（同一四、二〇二一年一二月）、野本瑠美・安田はるか「翻刻『ちとせの舎御せうそこ』」（同一二、二〇一九年一二月）

書誌

手錢美術館所蔵　写本折紙綴一冊

〔美術館資料番号〕六〇六

〔表紙〕縦一三・四×横一九・七cm。焦茶色地麻の葉文様

〔外題〕表紙左上に題簽「朝宵草」〔内題〕ナシ

〔丁数〕一〇〇丁、後遊紙一二丁

〔備考〕一面の行数はおよそ一〇行程度。和歌一首二行書き。朱の合点や墨書の記号等の書入が見られる。各部立の冒頭丁に部立名（春／夏／秋／冬／戀／雑）を記載した貼紙がある。

凡例

一、翻刻の字体は可能な限り底本どおりとした。ただし文字の大小・字配りは必ずしも忠実ではない。

一、便宜上、和歌・狂歌・文章（『丁巳出雲国五十歌撰』跋文）の冒頭に通し番号を付した。

一、歌頭に記載されている歌題は、歌の一行前に［　］で示した。

一、朱筆の合点は歌の一行前に［合点］と記した。合点が複数ある場合はその数だけ記し、合点の長さが短いものは［合点・短］とした。

一、歌頭に記載されている「〇」「五」「六」「テ」「ヲ」等の記号は歌の一行前に［　］で示した。

一、改行位置は可能な限り原本の通りにした。

一、各丁片面の終わりに当たるところに　」を付け、（　）内にその丁数及び表・裏（オ・ウ）を示した。

一、ミセケチ記号は「ヒ」で統一した。

一、虫損で判読不能な場合は□で示し、墨消は×で示した。重ね書きは上の字のみを翻刻した。

一、傍記や傍線については、可能な限り原本の体裁を残すよう翻刻した。空白箇所は（　）で示した。朱筆による書入は翻刻の後に（朱）と示した。

一、各部立末尾に存する白紙の丁数は（　）内に示した。

一、底本が不審な場合は（ママ）とした。

翻刻

春歌

［立春］

1　雪わけて若菜たつぬるつらさをも
　あかぬは野辺も春やたつらん

2　よもの海ちひろのみしめ打はへて
　野にも山にも春はきにけり

3　きへやらぬ雪の中にも春くれは
　みとりて見ゆるにはの松かえ

4　遠方の峯もみとりてかすみけり
　山の奥にもはるやたつらん

5　春あさみ外にはこゝろもつかぬ間に
　めくむ木草におとろかれける　」（1オ）

6　住なれし家のうちたにはるくれは
　ものあたらしきこゝちこそすれ

［元日］［合点］

7　けさよりはのきのけふりもおのつから

かすみと見えてのとけかりけり

［元日鶯を聞て］

8　春たつとなれもおほへてうくひすの
　ときめかしたる今朝のこゑかな

9　いつこより春は来ぬらんくれ竹の
　ひと夜へたてゝうくひすのなく

［子日］［合点］

10　ときはなる松のちとせにひかれつゝ
　よはひをのへにあそふもろ人　」（1ウ）

11　おとめ子か手ことに引る姫小まつ
　見るはかりにもちよはへぬへし

［梅］

12　ふゆかれのまゝに霞のうちはへて
　うらめつらしき梅のはつ花

13　鶴のゆくなこりにかほるむめかゝは
　けにはなとりの春といふらん

［月前梅］

14　はるの夜の月にまかへるむめの花
　かをらさりせは花と見ましや

［合点］

15　人まつとさゝぬ妻戸につきもりて
　袖なつかしくにほふ梅かゝ　」（2オ）

［花］

16　たちおほふかすみの袖もにくからす
　花をゝしめる心つくしに

［春月］

17　梅かをる軒はにかすむ月かけは
　花にゑひたるけしきなりけり

［遠村霞］

18　むら〳〵とかすみのころも打はへて
　ほころひぬらし見へるひと村

［山吹］

19　やまふきのしたゆく水にすむかはつ
　花のあはれをなかてやはある

［帰鳧］

20　かりそめにゆくといふさへかなしきを
　百日にあまるかり（朱）のわかれ路　」（2ウ）

21　天つそらかすめるつきにめかれせぬ
　中をすきゆく雁そつれなき

22　あけほのゝうすすみいろの玉つさを
　とこよにかりそつたへ行らん

［苗代］

23　せきいれるみつにこゝろのゆたねまく
　しつのしわさはいとまなけなり

［華］

24　くれなゐの花のすかたにあくかれて
　けふも山路をわけすくるかな

［旅中花］［合点］

25　うしとのみおもひしものを旅寐して
　あしたのはらの花を見るかな　」（3オ）

［社頭桜］

26 八重ひとへさけるさくらに玉垣の
　ひかりもきよき花のしらゆふ

27 ねきことのかなふしるしか神垣の
　桜ははなのゑみひらくなり
　　やよひ廿日斗り不老山に
　　まうてけるに桜のいと
　　さかりなりけれは

28 かくまてはおもひかけきや山さくら
　花のふゝきにみそきするまて

29 山の名の老せぬみねのはなゝれは
　ちりてふことやならはさりけん（ゑ朱）

30 こし道のけわしき事もおもほへす
　なかめにくるゝ花のおひかせ

」（3ウ）

［暮春］

31 くれてゆく春のなこりをゝしみてか
　いとあわれけにかわつ鳴なる

32 また咲ぬ華もありなん深山路の
　はるの行ゑをたつねてや見ん

［若菜］

33 つねに見る草とおもひと打むれて（へ朱）（ヒ朱）
　たつぬるのみはわかな也けり
　　おやのもとにまかりける比
　　前栽の桜いとさかりなりけれは

34 かせをおほふ君か垣ねのさくら花
　　いろをも香をももらさゝりけり

［春夕月］［六］［合点］

35 暮かねる梅のかきねにやとりては
　おほろけならぬ月の影かな
　　人の前栽の桜いとさかりなり
　　ける比けふ見にこよといひ
　　おこせけれとさわる事あれは
　　あすなんといひやりけれは
　　さらは手折て見せんとまた
　　いひおこせたれは

」（4オ）

［合点］

36 たのまれぬ夜のあらしもつらけれと
　た折も×としさなからに見ん（ウ）（ヒ）

［社頭桜］

37 さりやすき華のめくみも大やしろ
　さかり久しき山さはら哉（くら）（ヒヒ）

［名所立春］［合点］

38 名にめて、こほりも岸やはなれけん
　さくらの池に春そうかへる

［雨夜花］［六］

39 花にのみ心かよはす夜すからは
　おとせぬ雨もえこそねられね

［六］

40 うつろはんことのをしさに起あかす
　はるの夜雨そ花にしたゝる

」（4ウ）

［五］

41　春の夜はふるとも見へぬ雨なれは
　ひとしほ花の色やまさらん

［鶯］［六］

42　うくひすはなとて来なかぬ我やとに
　梅をうゑしはたれかためなる

［五］

43　鶯の朝いとかめしはつこゑは
　うれしき物のはしめ也けり

44　鶯も花のゑひをやさますらん
　あくると来なくまとのくれ竹

［山霞］

45　たちこめて山も見わかぬ八重かすみ
　ひとへはしらむ花のよこ雲

［早春］

46　はるかなる峯にかすみのかゝれるは
　山の奥にも春やたつらむ

［同］

47　鶴の行名残りにかほる梅香は
　けに花鳥の春といふらん

［同］

48　ふゆかれのまゝに霞の打はへて
　うらめつらしき梅の初花

［同］

49　ふきかわる風もぬるきにいかてかは
　千里をかけて春や来にけん

［桜］

50　あらしにもそむかて咲ける糸桜
　あはれ日を経て見るよしもかな

51　道行はやまの端ことの桜はな
　おもふことなき春の旅かな

［春夜］［合点］

52　きのふ見し花のなこりを夢の内に
　たとりもはてす明るしのゝめ

53　野に山にさわく心もしつまりて
　ふかくも寐いる春の夜半哉

［春夕月］［五］［合点］

54　夕風にはるゝ霞のたへまより
　はつかに見ゆる月のまゆ哉

［閑庭梅］［六］［合点］

55　柴垣の梅の下水こゝろせよ
　流れん香さへをしき比哉

［華交松］［合点］

56　春しらぬけしきか松の木の間より
　にほふあらしの山桜花

57　嵐やま松のみとりをそへみてそ
　ひとかたならぬ花とみへけれ

［朝花］

58　朝月夜おほろの山のいとさくら
　人のむすはぬ先にこそとへ

」（5オ）

」（5ウ）

」（6オ）

59 嶋山をへたつる波の朝涵に
わたりて見はや花のかけ橋
」（6ウ）
［雨中鶯］［ヲ］
60 柴の戸にしは〳〵来なく鶯の
聲をいたみて雨の降かも
［ヲ］
61 年毎に聞ともあかぬうくひすの
雨をおひたる今朝の一聲
［花満山］
62 足曳の山桜花ふもとより
尾上かけても咲にけるかな
［合点］
63 白雲かなにそとひとのまとふまて
咲も残らぬ山桜花
［山中早春］［ヲ］［合点］
64 山ふかみ雪も解なくに天つ日の
とよ坂のほるかけそ春めく
」（7オ）
［山中早春］［テ］［合点］
65 山水の音より春のたちぬるは
氷のせきや戸さしかねけむ
［柳風静］［ヲ］
66 青柳の糸のしなひをさそふへき
かせはいつこにかくれてか吹
［ヲ］
67 青柳の糸もてむすふ白露を
みたりもあへぬ春の朝風
安政六未の歳旦
68 あつさ弓はると冬とのもと末に
かけてそにほふはつ日かけかな
おなしく
69 たちそむる霞の末のうす月夜
奥ゆかしくも春は来にけり
」（7ウ）
［立春］［テ］
70 春きぬとおもひなしにや久かたの
天津日かけものとけかるらん
［同］［テ］
71 朝日この豊坂の日に影見れは
人のこゝろも春はたちけり
［同］
72 久方の空より来たる春なれは
朝日とゝもに霞そむらん
［×］［夜梅思］
73 春の夜のぬるまもをしく思へはや
かたしく袖に梅か香のする
［ヲ］
74 おもふ事夢にみよとや小夜ふけて
枕にかよふ梅のした風
」（8オ）
［夜思梅］［テ］
75 ぬは玉の月なき夜半も身に添ひて
かくれぬ物は軒の梅か香

［華］
76 かりくれて寐れはその夜も花の夢
見つゝもあかぬものにそ有ける
文久二壬戌正月五日立春
77 降雪にまかせてとしはくれたれと
まことの春はけふやたつらん
78 あらたまの春たつけふの嬉しさは
心ちこそすれ
をとめにかへるこゝろなるん（ママ）」（8ウ）
戊年納天満宮連板に出す
［岡］［〇］
79 紫のちりのゆかりとつむ人は
たれをしのふのをかの早わらひ
［早蕨］［〇］
80 花さけは人の往×のをかへとて
もゆ（ママ）るを下わらひかな」（9オ）
（※白紙6丁）
夏歌
［卯花］
81 山かつの妻木にさせるうのはなは
家路わすれぬしるへ成らん
［夏草］
82 きのふ来し道とおもへとなつくさの
しけりてけふはふみそまよへる
83 夏草のしけりてわかぬ岡野へに
またつゆなれぬ虫のねそする
［首夏］［合点］
84 神まつるときや来ぬらん榊葉の
みとりすゝしくそよくけふかな
［夏月］
85 なつの夜の月は真空にいさよふと
なかめやるまに明るしのゝめ」（16オ）
［夏月］
86 池水のかゝみにうつる月かけの
見るほともなく明る夏の夜
［夏風］［合点］
87 夏川やみとりの木すへかけさして
夕たつ風そすゝしかりける
88 河そへの竹の葉わけにふく風は
おときくさへもすゝしかりけり
［早苗］
89 時すきは苗もおひぬとしつの女か
手取せわしくうへわたすなり
90 すけ笠のしつくの田井は雨雲の
はれまもまたす早苗取なり」（16ウ）
［郭公］
91 なかために植にしやとのたち花に
ひと聲もらせ山ほとゝきす

［合点］
92 五月やみあやめもわかぬ大空に
　おほつかなくも鳴ほとゝきす
［里郭公］
93 今来なけまつ夜久しきほとゝきす
　さとをあまたにおもひわくとも
94 山のはの月を見る〳〵ほとゝきす
　うかれいつらん深草のさと
［蛍］
95 こもり江のみきはのあしのみしか夜を
　おもふゝしとやほたる飛らん　」（17オ）
［蛍］［合点］
96 ねもたてす草にかくるゝほたるこそ
　おのかおもひのたくひ成らん
［合点］
97 をちこちを飛かふよりもあはれさは
　みくさにすかるほたるなりけり
98 よもすからおのかものとやとふ蛍
　月もゆつりておほろかちなり
［秋近蛍］［合点］
99 そのはらやすれるとくさの秋風に
　あるかなきかの蛍とふなり
100 とふ蛍つひのよるへとおもへはや
　いまは草ねをはなれさりける　」（17ウ）
［田蛍］

101 ほにいつる秋をもまたす夕かせの
　すゝしき小田ほたるとふなり
102 ふきわたる山したかせのすゝしくも
　くるゝ田面にとふ蛍なり
［鵜川］［合点］
103 うつかひのかゝりのかけもうすらきて
　小倉の山にかゝるよこ雲
［合点］
104 のちの世のやみをはいかにたとるらん
　鵜川の瀬々に世を渡る人
［蚊遣り］
105 しつの女か寐もせてたつるかやり火の
　けむりもふけてうすらきにけり　」（18オ）
［五月雨］
106 人とはぬかた山さとのさみたれは
　身もくちなんと思ふ斗りに
［夜五月雨］
107 さみたれはいやふりそひぬ久かたの
　月はいつこの空にやとれる
［浦五月雨］［合点］
108 みるめかるあまのころもやいかならん
　うらさひしくもさみたるゝ比
［あをひ］［合点］
109 もろかつらかけてそいのる神山の
　けふのみあれにあをひかさして

［夏暁］
110 百草の露にましれるむしのねも
　またふかゝらぬ夏の暁　」（18ウ）
［蓮］
111 夜嵐になみのしら玉おきかわる
　はつすそ池のかゝみなりける
［蓮大いなるを見て池の深さをしる］
112 いかはかり此みなそこやふかゝらん
　身をもおきたき蓮葉のうへ
［あをひ］
113 神まつるものにしあれはあをひ草
　日かけきよくも見する朝露
［夏暁］
114 山のはにかたふくつきのすゝしさは
　いわんかたなき夏のあかつき
［くゐな］
115 やとことにおとろかしぬるくゐなこそ
　めさとく寐よとたゝく成らめ　」（19オ）
［くゐな］
116 小夜すからたゝく水鶏も天の戸の
　おしあけかたはこゑよはるなり
［あやめ］
117 年としにますたの池のあやめくさ
　引ともつきし御代のためしに
［合点］
118 あさからぬ浅香のぬまのあやめ草
　ひく手もたゆくおもほゆるかな
［名所夕立］
119 ひとしきりふるゆふたちに大ゐ川
　くたすいかたもひたぬれにけり
120 なわの浦ちすしにかゝるゆふたちに
　あみひくあまや袖ぬらすらん　」（19ウ）
［海邊時鳥］
121 時鳥八重のしほちをいつもかた
　ふねよりさきに鳴わたるらん
［夏朝］
122 夏の夜のあつかはしさはゆめにして
　さむる枕にあさかせそふく
［合点］
123 たへかたき夜半のあつさは夢となり
　うつゝすゝしき朝風そふく
［河邊御祓］
124 見るのみも心すゝしき川風に
　ふきはらはるゝあさのゆふして
［夏暁］
125 おもふとち語りあひつゝ四方山の
　しらむもしらぬ夏の暁　」（20オ）
［夏暁］
126 有明の月の名残りを鳴わたる
　からすの聲も夏はすゝしき

127 月すめるみなと御崎に寄浪の
なこりすゝしき夏のあかつき
［朝早苗］［四］
128 若苗にふしもやたつとあしたより
くるゝもしらすわくる賤の女
［四］
129 朝日かけうつるみとりの玉苗は
みとしろ小田に植る成らん
［市中納涼］［五］
130 中々にところせきまてさわくなる
市は更てそすゝしかりける
［六］［合点］
131 くれぬれはものうる聲のあつさをも
涼しさにしてかへる市人　」（20ウ）
［郭公遍］［合点・短］［合点］
132 一聲もきゝ得かねしを郭公
またぬ山路にをちかへり啼
133 うます猶まつにまけゝん郭公
里をあまたにふり出て鳴
［菖蒲］
134 石上ふる江の水にすゑみへて
あやめの若葉色つきにけり
135 さき草の三葉の殿にふく菖蒲
長きさかえのためし成けり
［暁水鶏］［ヲ］

136 伏待の月もかくるゝかつら木の
下闇かけて鳴水鶏かな　」（21オ）
［暁水鶏］［テ］
137 まちわひてさしゝとほそを暁に
またも水鶏のおとろかしけり
［テ］
138 つかの間に軒端はなるゝ有明の
月の名残りを（と）啼（ヒ）水鶏かな
［夏露］
139 行水のきしさへかわく夏川も
草の下葉は露けかりけり
140 そよとたに草もゆるかぬ夏の野に
すゝしさかくるつゆの玉ゆら
［祓］
141 真菅よしすかの川原に祓して
こゝろも身をもすゝしかりけり　」（21ウ）
［名所郭公］［テ］
142 三輪の山めにこそ見へね夕月に
神さひて鳴ほとゝきす哉
［ヲ］［合点・短］［合点］
143 ほとゝきす人待ならてあふ坂の
関の初音を聞よしもかな
［雨中棟］［ヲ］［合点］
144 紫のゆかりもしらてふるあめに
あふちの花のいろそあせける

［に］
145 五月雨のときにあふちの紫は
　さめても嬉し花のしたゝり
［林頭蝉］［ヲ］
146 ひとしきり降村雨に松はやし
　たちわかれたる蝉のもろ聲　」（22オ）
［林頭蝉］
147 山のはのこのもかのもに木かくれて
　しくるゝはかり蝉そ鳴なる
［すゝみ］
148 もとの露末の×（雫）となるまてに
　更るもしらすすゝみつるかな
149 川つらの一木かもとの朝すゝみ
　秋の聲ある風もこそふけ　」（22ウ）

（※白紙8丁）

秋歌
［初秋］［合点］
150 植おきしいもかかきねのほゝつきに
　ふくとはなしにわたる秋風
［七夕］
151 ひとゝせにひと夜をまつもたなはたの
　あかぬちきりのためし成らん
152 ひこほしのふなてをいそく浪の上は
　こゝろしてふけ天の川風
［露］
153 玉なして葉すへ（ママ）おけるしら露を
　ふきなちらしそ秋の夕風
154 よもすからおきてかつちる白玉は
　今こそつゆのさかりなるらめ　」（31オ）
［女郎花］［合点］
155 なにこゝろなけにさけともおみなへし
　秋のあはれのひとつなりけり
［合点］
156 あたし名のたつをはしらておみなへし
　つゆのなさけになひくとすらん
［虫］［合点］
157 明かたのまくらにすたくむしのねは
　秋のあはれのかきり成らん
158 松むしをともときかすは来ぬ人を
　うらみんことのかすやまさらん
［萩］
159 なすらへていわん（は未）かたなきあきの野に
　むらさき匂ふ萩か花妻　」（31ウ）
［荻］
160 夕されはいとゝさひしき柴の戸を
　あたにとひくる荻のうわ風
［鹿］［合点］
161 雨そゝく小野ゝしのはらわけかねて

妻とふしかの夜々に鳴らん
162 山すみのうきをかたらんとも、なし
つまとふ鹿のこゑの外には

［月］
163 山の端にかゝやきのほる月かけの
こたまにひゝくこまのいなゝき
164 うなはらにすむ月かけを見るまゝに
いそ打なみも花かとそちる
」（32オ）

［待月］
165 つかのまもまつとおもへは山のはを
さしいつる月のめつらしきかな

［月］
166 くまなくて木々のうら葉に置露は
玉かと見ゆる秋の夜の月

［きぬた］
167 ねさめしてきけは身にしむ夜嵐に
よそのきぬたの音そ淋しき
168 さらぬたにもろき木の葉の露なから
きぬたの音に落まさりける

［紅葉］
169 あかねさす日かけもうとき深山路に
まはゆきものは紅葉也けり
」（32ウ）

［深夜月］
170 野に山にならぬおもひをうつしつゝ
ふくるもしらし月をみしかな

［九月十三夜］
171 いろ〳〵となかめし月のうつり来て
てるはこよひと二夜也けり
172 長月はなのみなりけりをしとおもふ
こよひのかけもかたふく物を

［暮秋］
173 山川のはや瀬なかるゝ紅葉々も
秋もろともによとまさりけり

［合点］
174 ものことのかなしかりけるあきさへも
ひと日となりてをしまるゝかな
」（33オ）

［立秋］［六］
175 此ころはめにもつかさるゆふ霧の
なひくは今や秋の立らん

［露］［六］
176 浅ちふの露わけころもきてみれは
はらはん野へもなきそかなしき
177 夜やふけぬ竹の葉わけに置露も
ひとふしことにひかりそひける
178 あさちふの露わけころもすそおもみ
いつこの野へもたちそわつらふ

［杜紅葉］［六］
179 こくうすく梢まはゆくあやなすは
はゝそのもりの紅葉なりけり
」（33ウ）
秋の末つかた日のうらゝかなるに

ちかきわたりを野遊して
180 草の色風のおとにも×ひえて
秋はひるまもものそかなしき
［秋朝］
181 なかき夜をおもひあかして今朝また
床なつかしき秋にも有かな
182 うき秋といへと一ひのはしめなる
あしたは物をおもはさりけり
183 今朝もまたとくおきんとはおもほえす
あかしかねたる秋の夜なれと
［七夕風］［五］
184 秋風のたちにし日より棚機の
妻恋ころもかへしてやまつ
」（34オ）
［七夕風］
185 としにまつ君か舟出をいたはりて
こゝろしてふく天の川風
［樓虫］［合点］
186 たとり来てうてなのうへに鳴むしは
うき世いとひしこゝろ成らん
187 草ちかくきく虫よりも高き家の
かすかなる音そ猶あはれなる
［深夜月］
188 桂川みつはゐせきによとむ共
なかるゝ月のかけはよとます
189 秋といへはみしかき夜半にあらねとも
かたふく月はとき心ちしつ
」（34ウ）
［山月］［テ］
190 山のゐの水底ふかく澄わたる
月の心を誰か汲へき
［テ］
191 おもふとち鏡の山に庵しめて
月見る事の絶すしも哉
［野外虫］［ヲ］［合点］
192 葉かくれをおのかあり家と鳴むしに
いとゝあはれも深草のさと
［ヲ］［合点］
193 秋もはや末野に茂るみまくさを
おのかゆかりとくつわむし鳴
［ヲ］
194 むさし野は草のゆかりのふかけれは
ひるさへたへすむしそ啼なる
」（35オ）
［雲外雁］［テ］
195 およはすもしたひつるかな雲の波
横きり渡る雁の行へを
［テ］
196 はる〳〵とかさなる雲に鳴かりの
こゑはかりこそかくれさりけれ
［七夕］［テ］
197 我さへに待しこよひそ天の川
紅葉のはしをかけてあふらん

［テ］

198 七夕の妻恋ころも秋かせの
立にし日よりぬひつゝそまつ

［ヲ］［合点］

199 こよひまつ棚機つめのかさしにと
まつ咲そむる秋の七草

［田家残暑］［ヲ］

200 秋風はかとの稲葉にかよへとも
なをわすられぬやり水の音
人のもとへすゝむしを
おくるとて

201 ふり出て鳴もあはれな籠の虫に
露のあはれをわするなよ君

［市月］［ヲ］［合点］

202 月更て人の戸さしに市中は
野を行よりもさひしかりけり

［ヲ］［合点・短］［合点］

203 塵たつる市のさわきも夕（暮）くれは（ヒヒ）
しつけき月の影となりつゝ

［撰虫］

204 あはれなるむしの中にも轡むし
つよきはこゑのすさひなりけり

［撰虫］

205 大かたはいろつく野邉の草中に
まきれぬものは松むしのこゑ

」（36オ）

206 都人えらふもおほきむしのねは
いつれをよしとわかたさるらん

207 いつれをか家つとにせん野へことに
えらひてわけるむしのこゑ〳〵

208 さま〳〵にむしは鳴とも明かたの
枕にちかきねそなつかしき

［萩］

209 いちはやく玉をつらぬる秋萩や
露のつまとも人のみるらん
此下北天満宮てんくわん安霞ゑに
さんいたし候

［七夕契］［ヲ］

210 千代よろつ幾久かたの天の川
ふち瀬かはらぬちきりなるらん

［ヲ］

211 棚機の天の川原にいつよりか
一夜を千夜と契そめけん

［ヲ］

212 たなはたのほしの契そ誠なる
としに一よもむなしからねは

［古径萩］［テ］

213 花のふち瀬ふみし春もうつり来て
たかしめし野に萩の花咲

214 あし引の山ふみわけし早わらひは
小萩かもとの露となりけり

」（37オ）

［古径荻］
215 むかし見し妹かあたりを来てみれは
かきほの荻の露そこほるゝ
［月］
216 露しけきよもき庭（ママ）もへたてなく
すめるは月の御かけなりけり
217 今宵はと心くらふの山のはを
出る月こそ待に久しく
［小鷹狩］
218 いとゝしく露けきのへを我せこか
小鷹手にすゑはつとかりせり
［〇］
219 鶉ふす深草野への露けさに
あはれもかけよ秋の狩人

（※白紙8丁）

冬歌
220 夕しくれたちぬれましと旅人の
ころものせきをいまやこゆらん
221 さためなきそらのけしきを思ひ寐の
手枕さむくふる時雨かな
［××菊］
222 しくれ来る雨をいとひておほひにし
袖に香残すにはの白きく

」（37ウ）

［合点］
223 もゝ草のうつろふ庭にひともとの
菊は八千とせのいろを見せける
［水鳥］
224 夜もすから紅葉ましりにおく霜を
みきわにいとふ池の水鳥
［水鳥］
225 よしの川早瀬になるゝ水とりの
うきねのとこも今やこほれる
［似雨落葉］
226 そてぬれてたとると見しは夢路にて
うつゝも雨とふる（ヒチ）紅葉かな
227 わすれては雨かとおもふたにかわの
水ますはかりちる木の葉かな
［霜］［合点］
228 冬かれのくさ野ゝ中はときわなる
まつをちからに霜やおくらん
229 よそめにはあやしく見ゆる板橋に
ふかくも霜のおき渡りける
［冬枯］
230 むさしのにしけりし草もふゆ枯て
はるかに残る有明の月
［合点］
231 茂りあひしいその（へ朱）木立も冬枯て
あらはに見ゆる舟の通ひ（ヒ朱）路

」（46ウ）

［深松雪］

232 松かえのたわむはかりにふるゆきを
はらわ(朱)て見まくおもふ比かな

233 風もなく松の葉の上にふりつもる
ゆきこそあかぬ詠なりけり

［雨中紅葉］［合点・短］［合点］

234 見し花とうらうへならんこのころの
雨にいろますみねの紅葉々

」（47オ）

［年暮］［合点］

235 なにくれといとなむわさにくれ竹の
一夜のとしになりにけるかな

236 事なくてことしもけふにくれにける
あすのかすみをまつそ嬉しき

［合点］

237 あつさゆみひきもとゝめすゆくとしは
矢よりもはやき物にそ有ける(こゝちこそすれ朱)

238 身にそはるとしのくれともおもほへて
春のいそきそたのしかりける

［網代］

239 あしろ守ふけ行水の床寒み
かゝりはくらしひをや待ら(ママ)ら

」（47ウ）

［冬夕］

240 かきくらしふる白雪に白川の
関もゆふへは越そかねぬる

241 山里に雪ふりつもるゆふ暮は
いとゝ人めもかれまさりけり

242 山さとは降白雪にいりあひの
かねをくれぬと聞そさひしき

［浦千鳥］［二八］

243 村ちとり千代もちきりて住よしの
浦の名をよみ鳴わたるらん

［五］

244 磯菜つむあまの手わさも冬枯て
浦風さむく千鳥鳴なり

」（48オ）

［浦時雨］［五］

245 見るか(ママ)る海士のもしほ火かきたへ(え)て
いくめくりくる時雨なるらん

［五］

246 ひと時雨またも浦わに来つるかな
海士の狭衣ほしあへぬまに

［遠山雪］

247 白浪の打よするかとまとひける
雪にはるけき末のまつ山

［夕雪］［テ］［合点］

248 遠近の鳥も寐(は)くらに静まれと
降くる雪に夕闇(ヒ)もなし

［同］

249 ひるさへも人め埋みし山里に
かきくらし降夕雪のやみ(朱)

」（48ウ）

［川時雨］［ヲ］［合点］

250 打わたす橋かと見てし虹は消て
川のむかひは打時雨つゝ
［ヲ］
251 夕風の吹とほるまにふり出す
時雨やいつこ白川の関
［屋上霰］［テ］
252 さらてたに寐さめかちなる賤が家に
あら〳〵敷もあられ降なり
［ヲ］
253 妹と我寐屋の板やの玉あられ
見はての夢をさましつる哉
［海邊時雨］［ヲ］
254 白浪に日は照なから高雲のきつきの
なたに時雨きにけり
［テ］［合点］
255 雨雲の空にわけてや時雨さへ
かた〳〵に降ふたまたのしま
野霰」（49オ）
［浦時雨］［ヲ］［合点］
256 むさしのや尾花の袖もくちはてゝ
こゝろのまゝにふるあられかな
［テ］［合点］
257 野へ遠みうしひきかへるうなゐ子か
まそてたわゝにあられ降なり
［春漸近］［ヲ］
258 松風のそひてたゆまぬことのねの
さゆるは春のちかくや成らん
［ヲ］
259 雪つもるしはすの道のやはらくは
下にや春のきさす成らん
［ヲ］
260 さえさゆる師走のそらのあけくらみ
これや霞のはしめ成らん」（49ウ）
［山雪］
261 人里も雪の下道たへぬれは
深山のおくをおもひこそやれ
262 ふみわける人しなけれはあし引の
山の深雪はくまなかりけり」（50オ）

（※白紙11丁）

恋歌
雑歌
［初恋］
263 いかにしていはらかたちわけゆかん
いまさへたとる恋の山口
［恋の心］
264 かくはかりなれさらましを露の間も
わすれおかれぬ物としりせは
265 こひすれは八重のしほちの舟のこと

われもいくせにむねをこくらん
266 君ゆゑに恋のやつことなるわれは
あたなる道もゆきかへりつゝ
［こひやみ］［合点］
267 おもひきやかりそめふしの岩枕
おもき命をかけんまてとは　」（62オ）
［後朝］
268 朝露におきわかれてもわかせこか
身にそうはかりのこるおもかけ
269 ぬれつゝもいもかそへねのうつりかに
きかへまおしきけさの衣手
［占恋］［合点・短］［合点］
270 しられしと人めしのふのすりころも
かへしゝうらもむなしかりけり
［寄玉恋］
271 ひたすらにわすられもせてたまさかに
あふをうきみのひかりと思ん
［待恋］［合点］
272 いたつらに待夜つもれは今宵にも
たのみかたなきくものふるまひ　」（62ウ）
［合点］
273 あひ見なはうらみやさきへきかせまし
まつ夜かさぬる暁のかね
［合点］
274 来ぬ人のこゝろはさのみにくからて
ふけゆくかねのうらめしきかな
［寄山恋］［合点］
275 おもひやる山のかひよりたつくもの
なとわか方になひかさるらん
276 見るたひにこひのまされる遠山の
花のすかたを妹にたくへて
［後朝恋］
277 又の夜をちきるはかりをたのみにて
ふみわけらるゝ道芝の露　」（63オ）
［寄馬恋］
278 遠かたにいもかりゆけはきほひつる
こまさへおそく思ほゆるかな
［恋久忍恋］［合点］
279 年をへてこかすこゝろはかた岡の
いつまて草のしたにもへけん
280 年月のおもひをそてにせきあまる
なみたそこひのいのち成ける
［祈恋］
281 むすほれしこゝろもとけぬ御祓川
いのるしるしの有とおもへは
［寄浦恋］
282 うきことをつゝむ袖師のうら浪は
よるこそことに音まさりけれ　」（63ウ）
［互恨恋］
283 いはてたゝかたみのものとなりにけり

かへれはかへるくつのうら風
284 末終にかゝりとしらはなれましを
くつの葉風はかたみなりけり
［雪中恋］
285 いたつらにわかれちの雪ふみわけて
かへるつらさにこる物そなき
286 あはぬ夜のつもり〳〵てきえかての
雪なりなから恋のあたもの
287 うき人のことつて草もいとゝしく
かれまさるらん夜半の白雪　」（64オ）
［契恋］
288 神かけてちきりしことのたかはゝと
人の身のうへまつはかなしも
289 手枕のゆめにちきりしかねことの
いつしかさめぬ中となりにき
［寄烟恋］［六］［合点］
290 末つひに名にもたゝてやきへぬへき
むねのけふりの人に見へねは
［寄竹恋］［合点］
291 つひに身のふしとなるをもかへり見す
なにくれ竹とさわく心そ
［六］［合点］
292 あふふしもなきしの竹の露はかり
あはれとたにもいはゝたのまむ（ヒ）（ん）　」（64ウ）
［寄夢恋］
293 うつゝにはあひ見ることのかたけれは
夢てふものをたのむかはなさ
［寄水恋］
294 恋すれはゐせきにあまる水ならて
せきとめかたき我おもひかな
［久恋］［合点］
295 こりすまにかきやる文のもしほ草
つもり〳〵て身もこかれつゝ
［合点］
296 うきもせすなかれもやらん生田川
長くも人をこひわたるかな
［寄筆恋］［合点］
297 夏ならてとはにしけれは恋草は
筆のはやしと成けるかな　」（65オ）
［寄筆恋］［五］
298 あふことは月にまれなる君なれと
筆のすさひはたゆる日もなし
［旅泊恋］［五］
299 浪まくら末もむすはぬちきり哉
おもひもえてもかひやなからん
［六］
300 さためなき花の湊のかり寐には
かへりてよせし恋のあたなみ
遠き船路
［舟中恋］

301 見かへるもならぬ心のわかれこそ
にるものもなきつらさなりけれ
［寄花恋］［カ］［合点］［合点］
302 うき人の桜かさねの五つきぬ
いつかとくへき花の下ひも
」（65ウ）
［寄商人恋］［テ］［合点］
303 やすらけくまなしかたまは荷ひとも
恋の重荷はうるかたもなし
［歎名恋］［カ］［合点］［合点］
304 かくしてもとめても人のいひなさん
浮名にかへてあはんとそ思ふ
［テ］［合点］
305 濡きぬをこき紅ひにそゝき見ん
世のはかなさを口なしにして
［ヲ］
306 あふかとは世のへたてなく呉竹の
名はなき事にいふしもかな
［テ］［合点］
307 露とたにもらさしもの（朱）と草木にも
心を置しかひや何なり
」（66オ）
［不分身躰恋］［テ］［合点］
308 あた浪のしけき汀に打よせて
いふかひもなき恋もする哉
［毎夜待恋］［テ］［合点］
309 待わひておもひしのふのすりころも
夜毎に心打みたれつゝ
［ヲ］
310 更ぬともとひ来は待し此ころの
恨よりまつ嬉しからまし
［行路恋］［九］
311 月かけに妹かまゆすみ見てしより
むねもとゝろく小車のみち
［寄鏡恋］［合点］
312 恋せしといひくもらせとますかゝみ
われからてらすおもやつれかな
此分天満へ出す
313 見れはうくみねは恋しき鏡かな
妹とむかひしかけうかひつゝ
」（66ウ）
314 そのおもへはかゝみもつらくなりにける
わかおもかけの見おとりのして
［恋病］
315 ゆくすゑは身のいたつきと成ぬらん
引よるゆみのつよくもあるかな
［推量恋］［テ］
316 いな〳〵と人の心をくみかねて
いやはかなにもなりまさるかな
［ヲ］
317 人はさもおもはぬ事をかた糸の
われのみこゝろみたれけるかも
［ヲ］

318 うつせみの人のこゝろをくみかねて
うつし心もなき我身かな　」（67オ）

［寄魚恋］［テ］

319 いもか目をみそめ崎（ママ）の桜たひ
色にも香にもわれあかめやは

［ヲ］

320 鮎すらも落くる瀬々はある物を
なとわか恋のうかむ瀬もなき

［ヲ］

321 行水のかすかくよとの川むかひ
こひてふものは中にありけり　」（67ウ）

（※白紙7丁）

雑歌

［寄道祝］

322 ふかき谷けわしき峯もやすらかに
なゝつの道をあゆむもろ人

323 道もせのいさこのかすは物ならす
御代のためしに何をかそへん

［合点］

324 ぬは玉の夜の道さへまよわぬは
御代のひかりのめくみ成けり

［合点］

325 時をえておふる木草も道廣き
御代のめくみにもれぬかしこさ

［合点］

326 なみ風もおさまる御代のならひにや
八十嶋かけてかよふふるみち　」（75オ）

327 うらやすく其みち〳〵を世渡りの
つりする海士もこたふ舟哥

328 やす御代に時をたかへすふる雨の
めくみにもれすしけるたみ草

［祝］［合点］

329 君か代をなにゝたとへん鶴亀も
千世よろつよのかきりこそあれ

［寄松祝］［合点］

330 とことはにあふけはめにもこゝろにも
あかぬは松のみさほ成けり

［寄鏡祝］

331 玉くしけふたこゝろなき御代なれは
かゝみの影もくもらさりける　」（75ウ）

332 あきらけき御代に住身は丸かゝみ
うつすこゝろもかとなかりけり

［とよとし祝］

333 千代のはるはやもへいつるたみ草の
秋はみのりもよしや世の中

334 ゆたかなるとしのいさをは雲のうへ
草のいほりもたのしかりける

［寄舟祝］

335 なみた、ぬかしこきかちにひかれてや
こきゆく舟もうらやすの國

［熊］

336 たちこもる岩根木かくれすむ熊は
なか月のわをかけとたのまん　」（76オ）

［閑居］［合点］

337 世の事はおもひわすれし我やとに
ものなつかしくすめる月かな

［合点］

338 住かへて見てもおもひはたへぬかな
山もうき世のほかにあらねは

339 我やとはみつよりほかのともそなき
松のあらしはふかぬ日もある

340 柴の戸のあけかたちかくなるまても
月の外にはとふ人もなし
人の六十の賀に

［合点］［合点］

341 ちとせふる松のよはひにくらふれは
またうら若きみとり成けり　」（76ウ）
夫みちよし君四十の賀に

342 くろかみのなかきよかけてもろともに
をひゆくすへそたのしかりける
直良氏母君の六十の賀に

343 ちよ、ろつかきるふしなく竹の枝
きるもうれしき母刀自のため

［書］

344 はまちとりかくまてあとをつけつ、も
猶いにしへにたちかへりなく

345 見るたひにそのおもかけそなつかしき
みにそうはかり残ることの葉

346 たらちねのをしえの文のなかりせは
世はうちはしの渡りうからん　」（77オ）

［書］

347 夏の日もゆきのゆふへもいとひなく
かきあつめたるやまとことの葉
うかれ女扇をかさす

348 くれ竹のふしもさためぬうかれめは
たれとあふきのかせをいはまし

349 ことかたにおもひあふきのあれはにや
わすれぬもの、すてやすきかな

［山家風］

［同］

［紅葉］

350 そてせはき草のころも、紅葉して
にしきの戸はりたちおほひける　」（77ウ）

［月前遠情］

351 おもふとちふねに遊ひしその夜々を
おもへは遠きうなはらの月

［野晩生］

［素鵞川］
352 にこりあるわか心さへおりたちて
　むすふもきよしすか川の水
［出雲浦］
353 いつもかたもかりしほやくあまの身は
　たかみるめにもいとまなけなり
354 いつもかたみるめにあまるあま小舟
　白ほつらねし沖の夕はへ　」（78オ）
　人のむそしの賀
355 いつも川たのしきせのみことしより
　八千世もやすく君やわたらん
　嶋重老君六十賀に
［合点］
356 名におへるしま輪にねさす松の葉に
　老かよはひの千世やつもらん
　元日大社に詣て
357 あらたまる人のこゝろののとかさを
　神もめくしとみそなはすらん
　みちのくの人の九十二の賀に松によせる
　祝といふことをよみて人々遣し
　けるにすゝめられてよみて遣しける
［合点］［合点］
358 武隈のふたきのまつのきみならは
　八千代のすゑをみきといはまし
　おなし所の人六十の賀に
　みちのくの名所によせてよめと　」（78ウ）
　いひけれは
359 みちのくの君かよはひはいくかへり
　めてたき千代に會津ならまし
［橋上月］
360 いは橋の中たへぬとも葛城の
　山より出る月はよとまし
361 常にたにあかぬなかめを久方の
　月すみわたる天のはしたて
［玉］
362 白きくの花におきたる朝つゆを
　こゝろの玉のあえ物にせん
363 海（わた）にます神のめくみか海士（ヒ）人の
　まれにあはひの玉はえにけり　」（79オ）
　かねてすゝの舎うしの日記を
　見てはありし世にあひ見る心地なん
　しける折からある人かのうしの
　譜のゑにうたのかき給ひしかけ
　ものを見せけれはいとなつかしく
　おもほゆる比はやよひ末つかたになん
［合点］
364 ちりはてし花の名残りの折をえて
　むかしそかをる君かことの葉
［述懐］［六］［合点］

365 花さかぬ身には月さへかきくもり
うき事のみそ雪とつもれる
[楠氏][六][合点・短][合点]
366 水沫よりもろくきえにし身なと川
名のみはいくせよとまさるらん
[七][合点][合点]
367 君かためちりよりかろく身をなして
名のみはおもく残しつるかな
佐草美清君の六十の賀に」(79ウ)
[六]
368 幾代ともかきりはあらしみさき山
あふきてすめる君かよはひは
[五]
369 鶴山のつるのよはひにくらふれは
またひな鶴の君にそありける
[松契遇年]
370 二葉より松を友なる君なれは
えたたるゝまてかけにすまなん
[女][六]
371 世になひき風にしたかふ春やきは
うまし少女のすかた成らん
[六][合点・短][合点]
372 唐衣たちぬふわさに少女こか
よはき心をつくしつるかな」(80オ)
泉しう高林永興の七十賀

373 玉松の千代のためしも数ならす萬代
ふへき君かためには
[夏懐旧][テ][合点・短][合点]
374 夏引の手ひきの糸をくり返し
むかし恋しくおもほゆかな
佐草さゝ子君の一周忌に此たいの出けれは
[テ][合点]
375 我まよふ心つからか蚊やりにも面影
しのふなつのゆふ暮
弥生末つかた八重山権現へ
詣てゝ
[テ]
376 十重はたへ八重山霞そへこめて
あふく社そ殊にたふとき
おなし折雨いたう降けれは」(80ウ)
377 いとゝさへまよふ岩根の雨そゝき
親になつけそ八重の山風
おなし折つかゝといふ所を
とふりけるに山のすかたいはん
かたなく色々の花さへ見へけれは
[合点]
378 山里のなかめに花の露おちて
ふるさと人そいとゝこひしき
いつくしまへ詣てゝ
[テ][合点]

379 いつくしま海来る汐に御祓して
心すゝしく幣手向けり
［テ］
380 ちる桜さし来る汐にあらそひて
底はさわかぬ浪の花かな
おなし所の弥山の白糸の」（81オ）
瀧にて
［カ］［合点］
381 をりまかる巌の中も白糸の
瀧のなかれはみたれさりける
［狼］［テ］
382 めに見るはいかにかあらん狼は
人のかたるもかしこかりけり
狭衣物語を見て
［テ］［合点］
383 おもひきや迫門のもくつと成し身の
世に見るかひのあらんものとは
［名所松］［ヲ］
384 中々に千世のえにしはつねなれや
いつもときわのわかの松原
［ヲ］
385 小倉山むかしの幸行（ゆゆ）跡とゝめ
あるしかほなる峯の老松」（81ウ）
［樵夫］［合点］
386 山のはに日のかたふけは名々に
聲をかはしてかへる柴人
文月二日さらぬ事ありてものへまかりけるに
はしの紅葉しけるを見て
［合点］
387 夏くれて一夜のうちに色つきぬ
はし程あきをしるものはなし
388 なつ暮て風ともおもひよらぬ間に
はしの下葉はいろつきにけり
389 きのふけふ夏も今はにくれ竹の
一よにはしは紅葉しぬらん
［話］［ヲ］
390 おもふとち浮世かたりにあやふさも
わすれて渡る木曽の懸橋」（82オ）
［話］［テ］［合点］
391 長月のなかき夜毎に思ふとち
更るもしらぬ品さため哉
［金］［テ］
392 このめとも木のめの春にまかせぬは
金の花のつほみなりけり
［テ］
393 むさほれは心そにこるあらかねの
つちより出しこかねなれはや
物御上六十の御賀に寄鶴祝と
いふたいにて
［此分清書］

394 とことはに君そ見まさむ出雲かた
鶴のむれゐる春のあけほの
おなし折
395 老の浪よるてふその丶なかはまも
千代のわかめのう丶と社きけ　」（82ウ）
狂歌
［鹿近家］
396 遠音こそあはれにもあれ鹿もかく
のきのつまにはくるしかりけり
寄三弦恨恋
397 二世まてとちきりし中もたかやさん
末はとふなる三すし（　空白　）そも
［寄碁祝］
398 白黒のけぢめたゝしき御代なれは
はまの真砂のつきるこそなし
［恋うたひ］
399 おもひ内にあれはうたひの下かたり
聞はや人のとかめもそする
［海士手ならひ］
400 あまの子か手ならうわさももしほ草
かきあつめたるいをの名かしら
［時鳥］
401 時鳥すまの千鳥にあらねとも幾夜
ねさめの蚊やのせきもり　」（83オ）
本居内遠君の三周忌に
遣しけり
［合点］［合点］
402 うつ丶にてわかる丶よりもつらき哉
まくらに残る夢のおもかけ　此分出す
［夢］
403 みちのくのこかね花さく山までも
心はかよふ夢のうきはし
404 みし夢をさめてわする丶はかなさは
うつ丶か夢のこ丶ちこそすれ
［合点］
405 おもふこと見はてさるまにさめしこそ
ゆめのうき世といふへかりけれ
東中氏六十の賀に
［寄玉祝］
406 あらかねのつちより出しあら玉も
千代をふるまに君みか丶ん（ママ）　××××
［同折］
407 あらたまのとしことに咲玉椿君八千代の
かさしなるらん　此分清書　」（83ウ）
午ノ清（年）とし大人の六十の賀に
［合点］
408 すか川の流をくみてすかのねの
なか〳〵し世を君は経るらむ
春色酒浮
［狂歌］

409 かつの子の数々のめと目は柳かほは桜に
なりにけるかな
軽服
410 めくりあひてうれしき物はたらちねの
おやよ中よとおもふなりけり
五月末つかたしま重老君の
とはせ給ひける折　さの子
前かき
五月雨のをやみなき比嶋大人の
とはせ給ふことのいと〳〵うれしくて
さみたれのいふせき宿もけふよりは
君かひかりにはれやわたらん」（84オ）
松江葛満長月末つかた
411 とむらひ給ふ折のあいさつ
葛満
酒のみのうるはしみかは
412 此花のこと葉の香にそたちとまりつゝ
かへし　さの
さむしろの夜寒の宿に
413 酒なくは此みやひをにとはれましやは
安政四の五十歌仙の
しりへかき　さの子
414 八雲たつ出雲八重垣へたて
なく神代の事のへたてせすことの
葉のみちのみさかりなるもたふ
とき國からになんありけるそ」（84ウ）
こをしも楯舎大人のことにおむか
しみ嬉しみまして年毎に
国内の哥ともあつめてえり出
給ふにこたみ此書のしりへにひと
ことをとせちにのたまふもいなみ
かたくかつはおなしこゝろのうれし
さにたへすつゝましさをもわすれ
はてゝなん
二月はしめつかた小野川ぬし
はしめて来られけるに
415 きさらきのはた寒をもいとひなく
わかさむしろをとはれつるかな」（85オ）
［行故夢］［テ］
416 くれぬとも春はいとはす花の影
草のむしろに夢を結はん
［ヲ］
417 花鳥の色香をたとる春の夜も
たひねの夢はさめやすきかな
［ヲ］
418 つれ〳〵と花の木かけにたひねして
蜂にも夢をやふらるゝかな
［祝］
419 神山の岩ねに生ふる玉枕の
みかきたてたる御代にもあるかな

420 なみ風もおさまる御代のならひにや
八十嶋かけてかよふ船道　」（85ウ）

［述懐］

421 来てみれはこゝもうき世の外ならす
わか住山やいつこなるらん

422 わくらはにとふ人もなき山里に
すまはと思ふ比にもあるかな

内藤祝母君八十の賀に

423 百つたふ八十のちまたをふみかため
君そ八千世のしをりなすへき

御家こん礼を祝して

424 岩かねに二本生る玉椿枝を
つらねてひかりみすらん　」（86オ）

芳久大人にひなめの
神わさにものし給ふ
御禮したまひ其つとゝて
みかんちいさき椿の木に
つほみ多くつきたるを
おこせ給ひけり折せうそこ（ママ）
のおくに

425 ときしくのかくの木のみの
かくなから八千代の春の花みよ君（ママ）
といふおこせけるかへし

426 千代経へきかをりか君かたま物の
かくのこのみのかくはしきかな

427 ひかりある君か根引の玉椿けふより
千代の花をこそまて　」（86ウ）

文久二戌年正月五日立春

428 雪いたく降ければ
降雪にあまきる年はくれしかと
誠の春はけふやたつらん

又おのれもつら〳〵五十の
春を迎て

429 あらたまのとしのはしめの嬉しさは
をとめにかへる心地こそすれ　」（87オ）

文久二戌の四月一日直良に
法事ありける時

廿とせ余五とせの卯月一日
父の身まかり給ひしに去年の
五月七日といふ日母刀自の世に
なくなり給ひしをいといたふ
なけきてのちのわさつとめける
とき

430 けふさらにおもへかへせん
たらちねのうらなつかしき
藤衣かな

おなし比時鳥をきゝて

431 ほとゝきす一聲もらせ二親の
しててのかたみと聞かましものを　」（87ウ）

中臣正蔭大人の六十の賀に
月雪花といふ題出しに
432 月雪のきよさ白さもちとせへん
君かこゝろの花にこそよれ　」（88オ）

（※白紙12丁）

〔付記〕貴重なご所蔵品の調査をお許しくださった手錢家の皆様、調査にあたり様々に御教示を賜った手錢美術館学芸員佐々木杏里氏に厚く御礼申し上げたい。

なお、本稿は山陰研究プロジェクト「山陰の文学・歴史関係資料の基礎的調査研究と発信・公開に関するプロジェクト」（二〇二二～二〇二四年度、代表・田中則雄）による研究成果の一部である。

The Tezen Museum Archives “Asa-yoi-gusa”: Reprint and Introduction

NOMOTO Rumi
(Faculty of Law and Literature, Shimane University)

〔Abstract〕

The purpose of this paper is to reprint and introduce of “Asa-yoi-gusa”, which is owned by the Tezen Museum in Taisha-cho, Izumo City, Shimane Prefecture. The “Asa-yoi-gusa” is the personal collection of Tezen Sanoko, the wife of the seventh head of the Tezen family in the late Edo period.

Keywords: Tezen Sanoko, “Asa-yoi-gusa”, shikashū (personal collection), Tezen Museum